

資料

■周南まちづくりコンテスト 2012 応募資料 No. 1

交流・情報のターミナル化によって創発する
新産業のイノベーション基地「道の駅・ワッショイ周南」



【シミュレーション レポート】

★提案プランの各機能が実現した場合の「道の駅」の想定状態をスケッチ風に紹介いたします。

〈物販エリア〉

周南市の「道の駅・ワッショイ周南」が話題になっている。片道1時間以上かかるが、今までにない道の駅だという評判が気になり、休日、家族と共に立ち寄ってみた。

周南市の特産と言ってもすぐに思い浮かぶものはない。生鮮品や特産品売場も一見すれば、よくある「道の駅」とさほど変わった所はなさそうだが、よく見てみると商品一つ一つがとてもユニークで、売り方にも工夫が見える。「周南 W コレクション 100」のコーナーでは、来訪客がひと際足を留めてにぎわっている。このコーナーでは、何でもないモノが、何処でもあるようなモノが、ちょっと違った形で並べられており、買い物客の熱い注目を浴びている。例えば・・・

●周南お米コレクション

お米と言えば、よその道の駅では売場の片隅につままれた脇役のアイテムのはずだが、ここではずいぶん注目され、主役級になっている。

この「お米コレクション」は、近隣生産者の個人ブランド米を、可愛い二合用の小さな米袋に入れてずらりと並べているのだが、その種類がとても多い。周南市にはこんな数のブランド米があったらと疑ってしまうほど種類がある。これだけで注目してしまうのだが、それぞれのお米袋にはユニークなネーミングやモノづくりの背景が一見して分かるようパネル展示を併せるなど工夫されて、目を引く仕上げとなっている。よく見てみると中には「無検査米」なるものもあって、等級も表示されていない。個人ブランド米のほとんどが、普通に作られたよくある品種のお米なのだが、こういうコレクション販売をすることで従来とは違った商品表情を作り出すことができているのだろう。

道の駅は

全市民的に生み出す

身近な暮らしの中から価値を見出し

道の駅ブランド

を創出します

資料

■周南まちづくりコンテスト 2012 応募プラン No.2

【シミュレーション レポート】

「88歳の爺ちゃんがニコニコ元気に作った。米寿米」というのがあったり、「コンビナートに囲まれた田んぼで育った。ド根性米」などと「観音岳の麓でとれた。黄金米」「ナベづると仲良しの。つるっと米」「山奥の棚田で育った。おたな米」などなど、それを見ているだけで周南市の数々の田んぼの風情が浮かんでくるから不思議だ。

生産者の顔や名前はもちろんそのお米を育んだ背景が上手く活用されている。米そのものよりその背景・風景を買ってみたいと思わせる。それだけではない、それらのコレクションをいくつか売場でチョイスしてセット売りしている。

『うい〜く7セット』は一週間のそれぞれ、その曜日にマッチしたレシピを付けて、なおかつその料理にあった品質のブランド米を合わせている。献立に悩む主婦が思わず手をだすような心憎い演出だ。『棚田米セット』では、美しい周南市内の棚田風景を描いた絵はがきと組み合わせさせて、周南の棚田米の素晴らしさをアピールする演出で、十分に手みやげ・進物用に使えるようだ。お米をお土産にもらう経験がない私には、非常に新鮮に映った。

もちろん、気に入った個人ブランド米のどれをチョイスしても良い。5袋で750円、計算すれば割高なのだが、楽しみながら買っていきよう。もちろんそのお米の生産者との絆が生まれれば、その個人ブランド米は、ユーザーへ大袋で配送してくれるシステムもあったり至れり尽くせりだ。

このお米コレクション市内近郊の生産者であれば誰でも、この道の駅の〈交流ターミナル室〉で簡単な手続きをすれば、個人ブランド米を登録・販売できる。業者に卸すより数倍の価格設定ができるし、何より道の駅のスタッフとモノづくりブランドづくりを楽しんでいくという競創が張り合いとなっているらしい。

●TAKE プロジェクト（竹コレクション）

何処にでもある普通のお米が、こうしてブランド米として特産品になるなら、どんなものでもアイデア次第で売れるのだろうか。「周南あぜ道小石コレクション」なども企画されているらしい。田んぼの石ころを商品にしようと考えているのだ。こうなると正に錬金術そのものだ。中でも衆目すべきコレクションは「竹コレクション」。無尽蔵の資源ともいってよい竹を活用することができれば、頭の痛い竹害も減らせて一石何鳥ともなる妙案なのだが、その難題にここの「道の駅」は積極的に取り組んでいるらしい。

県別では山口県は第三位、何千とある市町村別には周南市が全国ベスト13位らしい。（因に一位は下関市）ベストなのかワーストなのか、周南市は竹林王国らしいので、言わずとこれを資源化できれば、厄介な竹林がお宝の山へと変わってしまうというマジック。これは納得だ。

その道筋を示しているのが、TAKE プロジェクトの一環で、この道の駅の「竹コレクション」なのだろう。良質タケノコの生産から、商品のコレクション化、竹の加工品、竹炭、竹材ペレット、竹グルメ、竹文化を含めて、商品や情報がわんさかコレクションされており、事業推進のベースとなるような連携機能を存分に発揮している。

道の駅は

地域資源・創出価値

6次産業化のイノベーション基地

情報のストックヤード

で在りたい

資料

■周南まちづくりコンテスト 2012 応募資料 No.3

【シミュレーション レポート】

そういえば、道の駅のワッショイ広場の遊具は竹製だった。子ども達が今までに無いような不思議なテンションで遊んでいたのもそのせいだろう。また広場の一角では、野外炊さん「ぼんぼら飯」が体験できるというので挑戦してみた。地元の山菜を使って竹筒で炊き込むのだが、竹筒や竹食器づくりからはじめるので、食育的にも工作的にも、子ども達には良い刺激になったようだ。

この竹材は持ち帰り自由で、竹細工が堪能できる工房が解放されおり、大人がハマりそうな竹家具にも挑戦できたり、最終的には竹の家屋のプランも紹介されている。大いに周南の竹プロジェクトを盛り上げている。「竹といえは周南」素晴らしいブランドに成長しそうだ。

道の駅は

子供と家族・多世代間の

地域の、ふるさとの文化を受け繋ぐ

ふれあいと継承の拠点

＜休憩・交流エリア＞

でも存りたい

●こどもの駅

ワッショイ広場では、恒例のお祭りをはじめ、各種のイベントが開催されているそうだが、今日はワッショイシュ周南バザーがあるというので見て回った。

このイベントもユニークで他の地域とはひと味違う。家族連れに大いに注目され近郊からも、これを目当てに「道の駅」に何度も訪れてくるらしい。ここでは「こどもの駅」と言っても良いようなスペースが形成されている。多世代間の交流と地域のふるさと文化継承を図る取り組みにも熱心だ。この活動を支えているのは「交流ターミナル室」の若いお母さん達中心のボランティア達らしい。モノづくりもそうだが、経済やエコ環境学習においても、しっかりとした作業や活動を通じた体験を子ども達に与えたいという考え強くあるようだ。

テーマパークで体験するお遊びのような疑似体験ではなく、実体験として子ども達を作る、大人達と作る。それを売ったり買ったりする。母さんと作った野菜や加工品、友達と作った手作りの玩具やゲーム等が並んでいる。余ったものを持ち寄るようなバザーとは、ひと味違うワッショイバザーが定期的で開催され、大いに注目を浴びている。

●地域通貨「Buchi」

そして、このバザーで驚いたのは「Buchi」と呼ばれる地域通貨で子ども達がやり取りをしている光景だった。そして、この地域通貨「Buchi」はワッショイバザーの中だけではなく、なんと「道の駅」の物販コーナーでも一般のお金と同様に通用する。おそらくそこにもヒントがあったのだろう。一瞬、破綻のギリシャ経済を救うかと言われる地域通貨「テム」を思い浮かべた。

後ほど調べてみると将来的には、市内の各地にある直売所や一般商店の加盟店でも使えるようにするのだそうだが、拡がりようによっては、これが地域の実行経済を押し上げるものになる可能性もあるとのことだ。子ども達が GNP を押し上げるとは夢のある話だ。ともあれ、この地域通貨が「道の駅」に還流してくることは確かだし、人たちの交流・連携に弾みがつくことは間違いないだろう。

資料

■周南まちづくりコンテスト 2012 応募プラン No.4

【シミュレーション レポート】

●周南キッズプロジェクト X

「交流ターミナル室」では、「周南ブランドラボラトリー」と協働で、なんと「周南キッズプロジェクト X」なる企画が進んでいるとも聞いた。この「道の駅」でやってきたスモールビジネスの育成を、子ども達の間で、新鮮な視線で一年をかけて体験してもらおうという企画で、学校単位、子供会、自治会単位の参加で毎年コンテストも開催、優秀なものには「道の駅」で商品化・販売されるという。

まず、子ども達に五つのミッションが与えられる。

- 1、資源を発掘せよ！ 2、資源を生産せよ！
- 3、加工や調理にチャレンジ！ 4、デザインしてみよう！
- 5、さあ、販売だ！

子ども達の身近なモノから資源を探し出して、ブランド化していく過程を体験させていくものだが、疑似体験ではなく、そのまま商品化され「道の駅」で並んでもおかしくないように実践的なものにしたいとのことだ。周南の子ども達による6次産業化プロジェクト！大人顔負けのヒット商品が生まれるかも知れない。

米や竹はもちろん一時に沢山実る柿や、雑草や枯れ葉まで、地域にある有形無形のモノを子ども達の目から見直してもらい、新しい価値を生み出すことへのチャレンジなのでしょうが、それよりもましてこのプロジェクトの素晴らしさはこのミッションを通じて、地域への愛着・誇りと言ったものを育ていけること、地域の人々と深く触れ合えること、その側面がとても大きいようだ。世代間交流とシビックプライドの種を蒔くにはぴったりの取組みかもしれない。

〈ツーリズム発信エリア〉

●周南新ツーリズム

「交流ターミナル室」の大きな役割は、単なるモノやヒトの通過点ではなく「道の駅」そのものが始点・終点になるターミナル化の意識を浸透させることのようなのだ。さまざまな企画・実行されているプロジェクトやイベントを見て分かるように「道の駅」から発信されたものがここに還流してくるようなものでないと、持続可能な新産業は成熟しないと考えているようだ。起点の思考が徹底されている。

周南の観光情報をとって立ち寄って時もそれは強く感じる。周南ツーリズム創出においても、この軸足は外せないものとなっているのだろう。

従来の「道の駅」といえば、大きな観光・道路マップが設置されており、近郊の観光や地域活動のパンフレット・冊子がコーナー並べてあるのがごく一般的で、その「道の駅」自体がまず単一の観光資源に終始してしまう場合が多い。その「道の駅」を起点として次々にドラマが始まっていくというストーリーに乏しいのだ。

「ワッショイ周南」では、まず、この「道の駅」を実際の起点や終点にしたツアーやサービスがたくさん企画されている。その多くは今まで注目を浴びたことの無いような観光スポットも多いのだが、例のコレクション方式で紹介されており、つい興味をそられてしまう。「周南パワースポット 100」「裏町グルメマップ」「棚田め

道の駅は

6次産業化の

小さな産業を開発・集積する

イノベーション基地

でもあります

資料

■周南まちづくりコンテスト 2012 応募資料 No.5

【シミュレーション レポート】

ぐりルート」などの地図や冊子も用意されている。この直売所で売られている産物を「作ってみたい採ってみたい」というニーズをくすぐって、芋掘りや果樹採り、花摘み等のグリーンツーリズムが用意されている。都市部の観光スポットと連携したサービスにも手抜かりはない。デバイス無料貸し出しサービスもあって、それを持って市内観光すれば、様々なサービスが受けられるような仕掛けも面白い。このように、各種のツーリズム情報とユニークな企画が多様に用意されていて、周南観光なら、「まずは道の駅によってそこから出発するか！」というのが常道になりつつある。

道の駅は

ライフアクションや

ライフアクセサリ、周南ツーリズムの起点（終点）

交流の起点

でも存りたい

●エコツーリズムの掘り起こし

観光だけではなく、スポーツ・レクリエーションの分野でも此所からスタートして汗をかいてみたいという人達が、ここに集まって来ている。登山、ハイキングや、ランニング、ツーリングを楽しむ人たち・市民アスリートがまず、この「道の駅」へ集合し、またここで解散していく。

この人たちは、この「道の駅」から発信されている情報の

やりとりがお目当てでもあるようだ。そういう場がこの周南では、無さ過ぎたのだろう。ここで交流しながら「ここも楽しかったよ」と情報をストックしていく面白さ、自分の体験をピックアップできて、ツーリズムコレクションに参画できる楽しみを満喫しているようなのだ。

近くの JR 戸田駅とのシャトルバス運行や温泉バスのお陰で、車でなくても鉄道からも集客を多く得ている。この「道の駅」は起点・終点として地理的にも申し分ないのだ。

まずは、裏山への愛着を深め、ここを護っている人々との連携を図り、シビックプライドの芽を蒔こうと「道の駅」開業と併せて創設された「市民裏山縦走大会」が華やかで賑やかだ。永源山公園や大平山からいくつもの山を踏破してきた多くのハイカーが、湯野温泉を經由してゴール地点「道の駅」を目指す。ワッショイ広場では表彰イベントが盛り上がり、縦走者の交換の輪がいくつもできている。この「道の駅・ワッショイ周南」がすっかりエコツーリズムの基盤整備の起点となって、周南方式のレギュレーションを獲得しつつある。エコツーリズムを掘り下げることで、新しいツーリズムを創出していくアイディアは成功しているのだろう。求心力ある発信地になりつつあることを肌で感じる。

<連携・社会貢献エリア>

●鮮度の高い情報発信

「道の駅」には、共同のサテライトスタジオがあり、FM ラジオなどライブがある。小さいが新聞社や雑誌社の合同ブースもあって、これを使って、メディアへのアプローチや市民と協働した企画の番組や記事が作れるようになっている。広場を含めて駅内全域は Wi-Fi 網があり、携帯やスマートフォン、タブレット等のデバイスを活用した買物特典情報やツーリズム情報、鮮度の高い情報をやり取りできるようなシステム「ワッショイ応援メール会員」の案内もある。

資料

■周南まちづくりコンテスト 2012 応募プラン No.6

【シミュレーション レポート】

不思議なことにこの「道の駅」からここにあるモノをネット注文したりすることも便利だったりする。これに登録して自分に必要な情報のアクセスを設定しておくだけで、様々な特典が得られる。スマートフォンなら「道の駅アプリ」を入れておくだけで、地域通貨「Buchi」の支給も無料で受けられ、活用したい場合は「Buchi」の融資も受けられる。（「道の駅」をスタート地点にして全くの「0」からの起業もあり得る訳だ）

●防災ボランティアネットワーク W

共同ブースには、通信キャリアの案内スペースもあって、通信デバイスと生活に密着した活用法をいろいろ知ることができる。この活用法で注目されるのは「防災ボランティアネットワーク W」だろう。ツイッターを中心にした防災・災害情報のネットワークだ。

地域毎の絞り込みができるよう近隣地区のボランティアスタッフを募集、連絡網を緻密に拡げている。事故や災害、それによる道路状況の把握は、行政や既成メディアより圧倒的に迅速な情報が得られる。消防・警察管轄部署・行政やラジオ局との連携もあるというので公式情報も得られ、ラジオでもリアルタイムの災害情報が得られる。これは使わない手はない。先の震災でも、ネット活用の有効さは大いに実証されている。

市の防災対策室や各通信キャリアも災害時には、この「道の駅」をはじめ2号線の数力所に優先的に緊急アンテナ基地を設置するよう準備されており、少なくとも2号線一帯では、通信不可という事態は避けられるそうだ。

ボランティアの活動は、全国各地の災害ネットワークと連携も深めており、災害地への支援または、災害を受けた場合のシミュレーション・支援要請等のシステムを作成している。「ほしいものリスト」などを実戦的に活用できるように、支援物資の集出荷のベース化も「道の駅」設備で対応できるようになっている。

●ソーシャル・イノベーション

防災・災害情報ネットワークはじめ、「道の駅」での活発なボランティア活動を支える各種の機能は、連携による活動の増幅を呼んで、ハード的にもほとんどコストをかけずに、充実した活動を展開できている。ソーシャル・イノベーションのお手本というか、この「道の駅」でしか実現できないような革新性が原動力とも言える。

モノづくり・ヒトづくり・ネットワークづくりを押し進め「ワッショイ！」とここに集う人たち、「周南人」には、自負があふれている。明日を見つめる眼が、誇りの芽をどんどんと育てているようだ。この地域への愛着と自信が一層力強い「新産業」を山のように集積させて、持続可能な社会への礎の一つとなっていくことは疑う余地もないだろう。

道の駅は

アイデンティティを生み出し

連携と愛着の共有感

シビックプライド

を熟成します

転載不可